

メッセージアウトライン マタイの福音書5：17～20 「律法とキリスト」

[17]「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです」

「律法」とは神がイスラエルの指導者モーセを通して与えられた十戒を中心とする様々な戒めと定め。これは神がイスラエルを神の民にふさわしい民族として教育し、整え、成長させていく役割があった。「預言者」とは神のみこころを神からの権威をもって宣べ伝える者のこと。サムエル、エリヤ、エリシャ、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルなどはその代表的な預言者。彼らも多くの約束事や守らなければならない規則、戒め、定めを民に教えた。それゆえ「律法と預言者」と表現される場合は旧約聖書全巻を意味する。

イエスの登場は当時のイスラエル人にとって大きな衝撃を与えた。その語る言葉や教え、また律法で安息日には仕事をしてはならないと教えられてきたのに、安息日に病人を癒すなどの行いを見聞きした人々からは、彼は先祖伝来の律法の教えを破壊する過激主義者であるとの非難の声があった。しかし、ここでイエスは自分が来たのは「律法や預言者」すなわち旧約聖書の教えを廃棄するためではなく、成就するために来たと言われる。イエス・キリストによる新しい契約（新約）は旧約聖書の成就に他ならないのである。それを理解しない律法学者、パリサイ人たちとの論争はこの後長く続いていくことになる。

[18]「まことにあなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します」

「天地が消え去るまで」とはこの世が神によって裁かれる時、イエス・キリストの再臨の時、人間の歴史が終わる時までという意味で、律法に書かれていることがいつまでも変わらないことを示している。昔定められたものなので今では欠けだらけ、間違いだらけで無効であるということはない。「一点」とはヘブル語アルファベットの最小の文字を表し、「一画」とはその最小文字の一画を示す。つまりイエスはこの世の終わりが来るまでに旧約聖書に書かれていることは隅々まで全部成就すると言っておられるのである。

当時、旧約聖書に書かれている預言の多くはまだ実現していなかった。そして

その書かれている数々の戒めも守りきれぬ者はいなかった。しかし、イエスが後から来られた時にこれをすべて成就、実現されたというのである。

旧約聖書には多種多様な題材があり、作品がそろっている。歴史、宗教、道徳、芸術、科学、政治、詩、預言、法律、歌、様々な記録等々。しかし、イエス・キリストが来られて初めてそこに中心的な一つの統一原理、大原則がその全体を貫いていることが分かったのである。

イエス・キリストが十戒に代表される様々な戒め、定めをすべて全うされたこと、出エジプトにおける過越の子羊の示すもの、幕屋、神殿における犠牲の動物のささげものは、やがて十字架上の死において自らのいのちを献げられ人間の罪の贖いを成し遂げられるキリストの苦難の予型であること、預言者たちの様々な預言がイエスの誕生、生涯、その死において成就したこと、イスラエルの苦難の歴史を通してやがて来られる真の救い主が示されていること、詩歌の中に歌われている神の愛と救い、やがて現れる神の国の描写等々……。まことにイエス・キリストこそ、旧約聖書に書かれていることをすべて成就させられたお方なのである。→マタイ1:22, 23, イザヤ7:14, 8:8, ヘブル人への手紙4:14~15, 9~10章、出エジプト12章、ヨハネ1:29, Iコリント5:7、ヨブ記16:19~21、ヨハネ1:9~18……。

[19]「ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます」

旧約の戒めを守り抜くことが天の御国へ入ることができる条件ではないので、律法は不要、必要なのはただイエス・キリストを救い主として信じる信仰のみであるとして、律法の戒めを破り、また破るように人に教える急進的な者であっても天の御国へ入ることはできるが、彼は天の御国では最も小さい者と呼ばれる。逆にそれらの戒めを自ら行い、また人に行うように教える者は天の御国では偉大な者と呼ばれるとイエスは言われる。動物の犠牲を罪の贖いのために献げるなどの儀式律法は、イエスが自らを十字架においてささげられて成就されているので必要ではないが、十戒に示されている道徳律法は今も守り、それに生きる必要はある。そしてそれは天において豊かな報いが与えられるのである。注意しておかなければならないことは、イエス・キリストを救い主と信じれば罪から救われるが、だから何をしても良いということではない。

[20]「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人

の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません」

「律法学者」とは律法の解説者、教師であり、「パリサイ人」とは律法を最も形式的に厳密に守ることを第一とする正統主義者のことである。彼らは確かに聖書に書かれている律法を熱心に守ろうとする。しかし、いつしかそれが行き過ぎて、聖書に書かれていないことまで、作り出してそちらの方を守り実行することに重きを置くようになった。一例をあげれば、十戒の第四番目に「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ」とある。→出エジプト20:8~9 これは神が天地万物を六日間で造り、七日目に休まれたと創世記2:1~3に記されていることを基にした大原則である。しかし律法学者たちはこれで満足しない。彼らは、「安息日とは働かない日である。では、働くとは何か」と考えて行き、いろいろなことが労働として定められていった。たとえば安息日に荷物を運ぶことは労働である。すると、次に荷物とは何かを規定しなければならない。そこで律法学者たちの律法では、「荷物とは干しいちじく一個と同じ重さの食物、大杯一杯に混ぜるだけの酒、一口に飲み込めるだけの牛乳、一つの傷口に塗れるだけの蜂蜜、体の小さな部分につけられるだけの油、目に貼る膏薬を濡らすだけの水、収税所の通告書を書くだけの紙、アルファベットの文字二つを書くだけの墨、一本のペンを作るだけの葦」等々、数限りなく続くのであった。これ以上の荷物を運ぶのは労働になるからだめというのである。律法学者たちはこのようなことを来る日も来る日も議論し、そしてそれらが数千の規則や規定として口伝えに長い年月にわたって伝えられていった。これが律法学者やパリサイ人たちの言うところの律法であった。しかし、イエスはこのような規定のことを指して、「天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません」と言われたのではないことを知っておかなければならない。イエスが言われた律法や預言者とは旧約聖書そのままのことなのである。

しかし、では「律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国へ入ることはできません」とはどういう意味なのか。彼らの宗教的厳格さ、熱心さの上を行く努力、生き方をせよということなのか。イエスはここで行いによる救いを教えているのであろうか。そうではない。誰も律法を行うことによっては神の前に義と認められないということが聖書の教えていることである。律法を完全に守ることができる人はいない。

ローマ人への手紙3:20~24には次のように書かれている。

「なぜなら、人はだれも、律法を行うことによって神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄誉を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです」

律法学者やパリサイ人がいくら宗教的に熱心であってもそれで神の前に義と認められるわけではなく、かえって自分の罪深さに直面させられるだけであり、真に神の前に義と認められるのは行いではなく、旧約聖書を満たして実現に至らしめた成就者である神の御子イエス・キリスト、救い主イエス・キリスト、私たちの罪を贖ってくださったイエス・キリストを信じることによって神の恵みとして与えられる義によるのである。すなわち、それが律法学者やパリサイ人にまさる義であるということであり、神の恵みにより信仰によって与えられる義であり、それは行いではなく神の御子、律法の成就者、私たちの罪の贖い主、救い主を信じる信仰によるものなのである。そしてその信仰を与えられた者、神の前に義とされた者はまたそれにふさわしい生き方が求められるのである。→ヤコブ1:22～25